脳卒中から生還した記者

横田三郎

毎日新聞社

脳卒中から生還した記者

横田三郎

著者紹介

横田　三郎（よこた・さぶろう）

昭和7年（1932年）京都市生まれ。同志社大学経済学部卒。昭和30年（1955年）毎日新聞大阪本社入社。京都支局，大阪社会部，福岡総局，東京社会部，神戸支局次長，大阪社会部副部長，神戸支局長，編集委員，事業部長待遇などを経て，昭和62年4月定年退職。現在，大阪本社編集局特別嘱託編集委員。

著書「黒い血」「電源の旅」，共著「ママの血液型」「なにわ町人学者」「子どもの森」「最後の一兵」「青春の軌跡」「ニューオーリンズ物語」など。

脳卒中から生還した記者

定価980円

1987年6月20日　第1刷
1987年8月30日　第4刷

著者　横田三郎

編集人　川合多喜夫

発行人　吉沢孝治

発行所　毎日新聞社

〒100　東京都千代田区一ツ橋
〒530　大阪市北区堂島
〒802　北九州市小倉北区紺屋町
〒450　名古屋市中村区名駅

印刷／中央精版
製本／田中製本

©Saburo Yokota, *Printed in Japan 1987*

ISBN4-620-30575-8

脳卒中から生還した記者

目　次

第一部　発病の周辺
あわや手遅れ　7
二度の死線　14
発病の引き金　22
奇しき因縁　33
悪魔の後遺症　40
骨肉相食む　46
心を残して　53
第二部　リハビリ事情
リハビリ今昔　65
小さな願い　73
左手は絶望的　82
自主特訓　90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

トイレ戦争 97
本が読めぬ 102
よちよち歩き 111
リハビリ銀座 121
脳と人工知能 131
聖夜の奇跡 138
テレビ端談議 145
自発的退院 153

第三部 社会復帰へ

出発進行 163
職場に帰る 170
残された道 178
元旦辞令 188

リハ通勤一年　198
甘えたらあかん　207
限りなくゼロに近く　212
全国脳卒中者友の会一覧表　228
あとがき

装幀　安彦　勝博

第一部　発病の周辺

あわや手遅れ

まさか、その頭痛が脳出血によるものだとは知る由もない。五十九年三月十一日に開かれたびわ湖毎日マラソンの運営をしているさいにひいたかぜがこじれたものと決めてかかっていた。だからマラソンから十五日後に開幕した第五十六回選抜高校野球大会の三日目、甲子園の大会事務局で前日（三月二十七日）のワンバウンドホームラン事件に対する抗議電話の応対をしているうちに、猛烈な頭痛に襲われた時も、頭の中に異変が発生しているとは思い付かなかった。

受話器を持つ私の、顔色のあまりの悪さに気付いたS部長が、「ただ事やないぞ。早退して医者に診てもらえ」と受話器をひったくり、その手でタクシーを呼んでくれた。それでも私は解熱剤を飲み自宅のベッドで一汗かけば良くなると安易に考えていた。

タクシーの後部座席に深く沈み込む。脈拍に合わせてハンマーでたたくような激痛が頭を覆う。

「運転手さん、気分が悪いから横になっている。阪神高速の月見山ランプまで来たら起こして。それから先はまた教えるから」

車は芦屋市から阪神高速神戸線に入る。目を閉じて眠ろうとしても、頭痛がひどく眠れない。間欠的に吐き気がこみ上げてくる。車内を汚すまいと持っていたボストンバッグのファスナーを開けてお

く。カメラ、テープレコーダー、下着のスペアなどが入っている。吐くのならその中にすればいいと覚悟を決めた。

魚崎ランプの表示が車窓から見えたころ、胸部から腹部にかけて絞り込み、すりこ木で内臓をこね回すような痛みがかけ巡る。脂汗が額にじっとり滲(にじ)んできた。「これはかぜだけではない。内臓の急性の病気に違いない。この調子では家まで我慢できそうにない」気が動転して、最寄りの病院も思い出せない。頭と腹部の痛みはもはや尋常なものではないことを悟った。

そうだ、途中に一年前まで支局長をしていた神戸支局がある。支局に立ち寄り、救急車を呼んでもらおう。神戸市内には市立神戸中央市民病院という一流の総合病院がある。あそこに行けば何とかなるだろう。支局の通用口にタクシーが止まった時、これで助かったと私はほっとした。

料金をタクシーの伝票に記入するため、それを左手に持ち変えようとしてりつ然とした。左手はだらんと垂れ下がって全く動かない。指先は氷のように冷たく、触覚も完全に失われている。運転手さんに伝票を運転日誌の上に乗せてもらい、右手でどうにか金額を書き込んだ。

「手を貸しましょうか」というのを制して自分でタクシーから降り、右手でバッグを提(さ)げ、支局の中によろよろと入って行った。左足に感覚があったかどうかは覚えていない。幸いO支局長は在席した。「大変な病気にやられたらしい。救急車を呼んで」と頼む。言葉はすでにしどろもどろだった。

支局長とサブデスクのN君が、救急車が来るまで安静にしているほうが良いと言って応接室のソファーに寝かせ、ネクタイを緩(ゆる)めてくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私は支局長時代に神戸市の救急医療システムについて調べたことがある。自宅（垂水区塩屋北町）周辺に開業医も手ごろな医療機関も少なかったからだ。隣人たちも急病のさいは救急車を呼ぶしかないという。その結果、神戸市には神戸市医師会の運営する休日夜間診療所があり、重篤な急病人は同診療所や開業医を経由して、救命センター的中核病院の市立神戸中央市民病院か市立西市民病院に転送して万全を期しているものと認識していた。だが私の場合は週日でまだ日も暮れていない。近代都市の神戸で適切な医療が受けられないはずがないと安心し、ひたすら救急車を待っていた。

救急車は数分で到着した。救急隊員は私の話しぶり、左半身マヒなどから脳卒中だろうと言った。私も頭痛の異常な激しさと吐き気、マヒの具合などから、脳血管疾患らしいと推測していた。それで救急隊員に脳外科手術の可能な病院、できれば中央市民病院に運んでほしいと訴えた。

隊員はそれには答えず「かかりつけの医者はいないのですか」と尋ねる。二十五年前の交通事故以来、慢性の病気や大病を患ったことはないから、いるはずがない。だから、中央市民病院に搬送してほしいと重ねて頼んだ。「あそこは満床で受け入れてくれません。ほかを当たります」救急車は一向に走り出そうとしない。

消防局の指令室へ空床のある病院を探すよう無線でやりとりしている。この間数分だったろうか。頭痛は極限状態に達し、左半身から急速に力が抜けていくのを実感している当人にとっては、それは一時間とも思える心細い空白の時であった。

結局収容されたのは一般外科病院だった。私は希望した病院に入院できないのは仕方がないとして

も一般外科病院というので半ば絶望的になっていた。K病院では脳卒中初期患者に対する内科的な治療は行われたようだ。要するに点滴で薬剤を注入するだけだ。液の中に鎮静剤が混入してあるのか、私はまどろむような気分になることはあったが、絶え間ない頭痛のため、意識も失わず眠ることもできなかった。暗くなってから妻が駆けつけてきた。S事業部長、Yデスク、O支局長も病室の外まで来ていた。

当宿医が妻に「脳出血だと思いますが、出血部位が特定できない。それを調べるにはCT（コンピューター断層画像診断法）が必要ですがここにはありません。内科的処置で出血による血腫の広がりを抑えるしかない。CT検査や脳外科手術を望まれるのなら他の病院を紹介してあげます。そちらで心当たりがあれば転院されてもかまいません」と説明した。

わなにかかった動物のように私はベッドの上でもがいた。「これじゃたらい回しと同じじゃないか」

私はかねがね医療問題に興味を持っていた。四十一年には、母子血液型不適合による重症黄だんの乳幼児を、交換輸血などの治療法で脳性マヒになるのを防ぐためのキャンペーンを行い、『ママの血液型』という単行本（共著）を出版し、全国のお母さんたちから感謝された。四十三年には、戦後ペニシリンなどの抗生物質の開発で死滅したと思われていた梅毒が三十八年ごろから東南アジア経由で九州に侵入、全国的に流行する兆しを見せていた実態をリポートし、梅毒絶滅を願う〝黒い血〟キャンペーンを展開、厚生大臣から表彰を受けた。

さらに四十六年から四十九年にかけて、全国のほとんどの都市、地域で救急病院のたらい回し事件

が続発、多くの犠牲者が出たため、五十年には一年がかりで救急医療キャンペーンを継続的に行い、厚生省や自治体の無為無策ぶりを追及した。その結果、全国各地に休日夜間診療所が開設され、たらい回しによる悲劇は大幅に減少した。素人にしては医療の世界のことをよく知っているつもりだった。だから医師や医療行政に携わる公務員の知人は多い。

そんなわけでK病院に入院を続けていたのでは新しい医療機器による診断や、脳外科の先進的な手術を受けられないまま死に至るか、命を取り止めても重度の障害が残り、寝たきりになってしまう恐れがあり、せいぜいうまくいって車イスでの生活になりそうなことを私は心配した。妻は私以上に憂慮し、現状を打開するべく焦っていた。私の知人、友人などに八方手を尽くして連絡をとり、CTがあり手術のできる病院を探し回った。時間は情け容赦なく過ぎていく。私の意識もそろそろ混濁しそうな状態になりつつあった。

発病して三日が過ぎた。私は選抜大会のことが頭にこびりついて離れず、眠りから覚めると会社に行こうとして身もだえした。左半身の完全マヒなのに。右手右足を使ってベッドから降りようとして妻を困らせた。三十日の夜、妻が病室から出ていった隙に、ベッドの横の手すりを乗り越え、床に立とうとして転げ落ちた。

点滴液のビンは床に落ちて割れ、大騒ぎとなった。妻も医師も激怒した。妻には悪いと思ったが、医師にはこちらから文句をつけたかった。とにかく私は他の病院で、脳卒中患者としてごく平均的な医療を受けたかった。妻には吹田市の国立循環器病センターに移りたいと言っておいた。妻は私の友

人である大阪府職員のYさんに頼った。彼や大阪府衛生部のO君などが、各方面に手を回してくれた。彼らの尽力で循環器病センターが引き受けてくれることになった。K院長は「移動するさいに万全を期してください」と言うだけで医師を添乗させるとは言わない。現代の医療で常識となっている治療を受けるためなら、移動に伴う危険など恐れてはいられない。点滴だけで脳死に至るのを待つなんて真っ平だ。

転院にさいしてはO支局長の支援もあり、神戸市消防局の救急車が例外的措置として吹田市までの越境搬送を認めてくれた。ただし、同乗する医師は私の方で探さねばならない。搬送中に病状が急変しても消防局としては責任はとれないからといわれていた。当然のことだ。だが、土曜日に脳血管疾患に精通した医師を見つけ、救急車に乗って面倒見てくれというのは、あまりにも虫の良い願いである。またYさんの助けを借りた。彼の知人で、千里ニュータウンの千里救急救命センター所長の太田宗夫医師が引き受けてくださった。Yさんが強引に頼んでくれたのだろう。救命医療の第一線で活躍する高名な医師が添乗してくださり、私の希望する病院に移れるのだから、きっと助かると妻も私も信じつつあった。

国立循環器病センターでは土曜日なのにCT、脳血管撮影など手術をするために必要な諸検査はその日のうちに全部すませた。診察した脳血管内科の屋宮央哉（おくみやのりや）医師は「血腫の広がりが大きいので、このままでは脳圧が上がり、脳死に至る恐れもあります。手術をして血腫を取り除くのが最善の方法だと思います。ただ命は助かりますが、出血してかなり時間が経ち、運動中枢部が血腫で侵されていま

すから、重い後遺症は残るでしょう」と妻に率直に話してくださった。妻はもちろん手術を選び、その選択が正しかったと私は妻と医師に感謝している。

「手術するのよ」と妻にささやかれ、私は「手術すればきっと良くなるよ。後遺症はリハビリで何とかなるさ」と努めて明るく振る舞った。事実、私の精神状態は安定していた。それは同院の医師、看護婦、検査技師など全スタッフが患者に優しく接し、信頼感を与えてくれたからでもある。

手術は入院した日の翌日、五十九年四月一日にするという。当日は私の五十二歳の誕生日だった。「これからまた新しい人生が始まるのだ」私は誕生日に手術することで良い結果が出るだろうと思い込むことにした。

手術前、頭髪はかみそりでじょりじょりとくりくり坊主にされた。中曽根康弘さんほどではないが、あんな具合に毛髪が薄くなりつつあり、ヘアースタイルも中曽根亜流にしていたが、丸坊主のわが頭を鏡でみると意外に若々しく見えた。これを機会に、「王様と私」「荒野の七人」などの名画でわが国にもファンの多かったアメリカの名優ユル・ブリンナーにあやかって、一生ぴかぴかの頭で過ごすのも悪くはないなと考えた。それなら日々薄くなる頭髪を気にして高価なだけで効果の少ない育毛剤に投資することもないし、手術跡がはっきり残るだろうから「切られの与三」変じて「頭切られのサブ」を異名にして記者生活を送るのも妙案だ。他愛のないことを考えているうちに「麻酔をかけます」と点滴液に麻酔薬が混入された。

二度の死線

麻酔は夢見心地のような気分になるものだと私は半ば期待していた。三十四年六月三十日に私は大阪府下の八尾市で交通事故に遭い、死線をさまよったことがある。そのさいはガス麻酔で、脳のしんがじーんと冷たくなり、深い穴の底へ吸い込まれていくような気分になって意識を失った。それは一種の陶酔感を伴った快い眠りのようだったと記憶している。

しかし血管注入による麻酔はあの陶然とした気分と全く違ったあっけないものだった。「何だつまらない」と思う暇もなく、意識は奪われていた。この後、私は四半世紀前の医療体験と現在の医療との大きな差異にしばしば戸惑うことになる。

手術は約五時間かかった。私は手術中におかしな夢を見ていた。手術を受ける部屋は広大な飛行機の格納庫のようなところで、床は砂地だった。地面のそこかしこからドライアイスから発する白い煙のようなものが立ち上っており、部屋全体が象牙色の色調で統一され、医師や看護婦は古代ローマ人のような白い布をまとっている。全ての動作がゆったりとして、気持ちが静かに落ち着くような雰囲気だった。

床のところどころに穴があいていてそこからモグラが顔を出す。といっても私は実物のモグラを見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com